

北海道の草地農業に対する I G C ポスト・コンGRESS・北海道ツアー 参加者の印象および提言

先に紹介したようにファーマーズ・フォーラムがツアー参加者を混じえて帯広でもたれたが、ツアー参加者にとっては、かなり窺屈なスケジュールの旅行中ということで、不十分な時間の制約のもとで行なわざるを得なかった。それゆえ、論議が十分につくせないことが当初から予想された。そこで質問書を予めツアー参加者に渡し、広く意見を集めて不足を補う事とした。

回答は、11名の欧米系参加者から寄せられた。中国からの参加者も多かったが、回答はなかった。このことは言葉の制限の他、中国における草地農業の現状からみて、止むを得ないと考えられる。11名の方々の御意見を紹介する。

BARNES, R. F. (USA)

- ・マメ科草地の造成と維持年限の延長は、万国共通の問題である。
- ・十勝農協連によるインフォメーションサービス網が印象的であった。

CROFTS, F. (Australia)

- ・購入飼料を減らして、より効率的経営にすることが望まれる。そのためには、一頭当りの乳量を高め、なおかつヘクタール当りの産乳量を向上させること。また、労働生産性を高めるための機械利用を行なうべきである。

CRUSH, J. R. (N. Z.)

- ・北海道の酪農はアメリカの技術を主として取り入れているが、それに替わる技術についても考える必要がある。
- ・以下の研究をシステムで行なう必要がある。
 - ①N無施のマメ科優先放牧草地。
 - ②N施肥の採草用草地とそれにふさわしい草種の選択。
 - ③冬期に乾乳して濃厚飼料を節約する。そのために繁殖時期を揃える。
- ・日本とニュージーランドは火山灰土その他の点で似ており、研究者や農家の親密な交流が望まれる。

ELGIN, J. H. Jr. (USA)

- ・北海道のトウモロコシ生産はアメリカに勝るとも劣りません。
- ・チモシー／アカクローバとトウモロコシのローテーションが10年というのは長すぎ、5年が適当であると思う。
- ・乾草およびヘイレージの質を向上させるために、アルファルファを導入すべきであると考え。しば

らくはアメリカ又はヨーロッパの適品種を活用し、2～3年後には自国育成品種を利用できるようにすると良い。

HODGSON, J. (UK)

- ・濃厚飼料多給・高乳量体系よりも、効率的放牧と簡易な牧草保存体系の方が、コストと価格のバランスの変化に対して、より柔軟である。現在好まれている体系よりも、草地に根拠を置いた体系を確立する方が、潜在的な有利性をもっているのではなかろうか。
- ・放牧時期あるいは採草時期は、ヨーロッパよりも遅いように思う。草地からのTDN生産が、想像してた数字よりも低い。制限要因は生産よりも利用にあると思われる。

JÖNSSON, H. A. (Sweden)

- ・より早い収穫を奨励していたが(たぶんHodgsonによる)、あまりその点を追及すると、草地に無理がかかるであろう。

KEMP, D. (Australia)

- ・牧草を最高水準に生産するよりも、利益を最大にする生産をすべきである。
- ・牧草の利用を効率的に行なった後、サイレージ用トウモロコシを補助的に利用することが望ましい。
- ・早春利用や耐寒性品種をウェールズ・ニュージーランド・ヨーロッパの品種から選ぶとよい。
- ・N施肥を抑えて、イネ科とマメ科の適正な割合を保つこと。
- ・リン酸施肥は減らすことが出来るのではないだろうか？また、帯状の無施肥地を残すよう、農家を指導する。これによって必要施肥量がわかる。
- ・バンカーサイロやコンクリートサイロの方がスチール気密サイロより安い。

KUNELIUS, H. T. (Canada)

- ・アルファルファを使うべきである。東カナダに適当な品種があり、試みる価値はあろう。
- ・北海道ではタワーサイロが多くを占めているが、バンカーサイロ等の低コスト貯蔵方式についても再考の余地がある。
- ・牧草の伸びない10、11月には、ケール・飼料用カブ・家畜ビート等を栽培するとよい。

SPATZ, G. (W. Germany)

- ・西ドイツでは、屋内でドライヤーを用いた乾草作りが導入されている。
- ・自然草地となっているペレニアルライグラスのエコタイプを研究中である。これは、きびしい気候、強い利用にも耐えることができる。

WERE, A. O. (Kenya)

- ・ケニアホワイトクローバを混播用に試してみたいかですか。

WESTGAARD, P. (Norway)

・北海道で草地農業が短時間に発展した理由は、研究の成功と効率的な普及によるものであろう。

ファーマーズ・フォーラムではウェディン、山口両氏から期せずして同じように、「有利な酪農経営のためには、安価で良質な粗飼料生産、とくに草地生産が基本的に重要である。」ことが強調された。また、ツアー参加者の多くは、この事に関して提言をしており、酪農経営における草地生産の重要性が改めて認識された。しかし、このことは単に一酪農家の経営にとどまる場所ではない。IGC総会において確認されたように、全世界の穀物の約40%が飼料用に消費されている現状からみて、草の生産増大と、その穀物への代替は世界の食糧供給へも大きく貢献するものである。さらにこれからの新しい研究の発展に対して、ホジソン氏の「草生産より、その利用が問題では……」という提言、あるいはジョンソン氏の「品質を高めるために早刈りが勧められているが、早刈りは草地密度を減少させ、永続性を低下させる。それ故、早刈りを行なう場合は長期利用をしないということを前提とすべきである。酪農家の経営のなかで、個々に判断されるべきことである。」という提言などは、非常に示唆に富んでいるように思われる。如何がなものであろうか。

(文責：嶋田 徹・美濃羊輔)